

文学館だより

令和 5年 6月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982-68-9511
文責 日高 第86号

新企画 高森文夫未発表直筆詩原稿51篇 順次公開!!!



日向市東郷町が生んだ含羞（がんしゅう＝恥ずかしがりや）の詩人、高森文夫。延岡市教育長、東郷町教育長、東郷町長の職に身を置く傍ら静かに詩作に打ち込むものの、詩人としての功績を決して自ら語ることはありませんでした。県内学校17校もの校歌の作詞も手がけています。高森は詩集を3冊出版しています。第2詩集『昨日の空』の出版過程において、まとめながらも世に出ることのなかった直筆原稿を残しています。この未発表直筆詩原稿を高森文夫没後25年の今年、通年事業として順次公開していきます。（写真は54歳頃の高森文夫）

企画展 高森文夫直筆原稿展示

会期 令和5年6月2日（金）から 平成10年6月2日 高森文夫逝去 88歳

会場 若山牧水記念文学館 第2展示室
開館時間 9:00~17:00
休館日 月曜日（祝日は開館しています）
入館料 高校生以上 310円 / 小中学生 100円（団体割引あります）

概要 未発表直筆詩原稿「^{きょうしゅう}嬌羞の歌」を1ヶ月ごとに入れ替え、没後25年の今年、通年事業として全51篇を公開展示する。

第13回 青の國若山牧水短歌大会 作品募集



募集部門

【一般の部 自由題、題詠『道』】…… 全国どなたでも応募できます
【小・中・高校生の部】…… 県内の児童生徒が応募できます

選者

【一般の部 自由題】 伊藤一彦（歌人、若山牧水記念文学館長）
【一般の部 題詠『道』】 大口玲子（歌人、第17回若山牧水賞受賞）
【小・中・高校生の部】 大口玲子

応募締切

令和5年 8月10日（木）

表彰式

令和5年 12月17日（日）

詳細は、若山牧水ホームページでご確認いただくか、若山牧水記念文学館に直接お問い合わせください。短歌ブームといわれている今、みなさん、出番です。57577の調べに乗せてどうぞご投稿ください。たくさんのご応募お待ちしております。

昨年度の入賞作品より

産声は生まれて最初のありがとう どういたしまして我が家へようこそ 一般の部題詠「声」
予告する「明日は雨が降りそうです」「君への愛があふれそうです」 高校生の部

特集 牧水没後95年

その2 「牧水と思い出」

牧水姪キヌの夫 陶山 勲

大正13年4月であったか私が穆佐小学校に転勤した時のことです。ここは私の生家の隣村であります関係上親類がかなりあります。その内で阿万武夫という人がいるのですが、この人は若い頃から文学に興味があったので牧水とも交際していたとみえて、或る日私に向かって君の家内は牧水先生の姪だそうだが自分は牧水先生とは早くから親交があって自分の長女の露というのは牧水氏から命名してもらったのだと、これを聞いて叫びました。牧水と縁故関係になる以前にこんな関係が早結ばれていたのかと思いますと、又昨年(昭和28年)の記念号に一寸記載しました私の二男の死去が牧水と同日同時刻であったこと等考えますと牧水とは切っても切ることの出来ぬ縁が早くから出来ていたのかと不思議に思っているところです。

私は家内と結婚したのが大正7年でありましたのでその後牧水と親戚の交際をして来たわけでありましたが牧水は何回か日向に帰って来ましたが私の会ったのは大正12年東京に行った時沼津の上香貫で会ったのが初めてでありました。この時は名前は忘れましたが東京の金持の別荘を借用していました。別荘でありますし立派な家でありますので沼津市では金持の息子が借用しているものと思ったのか、税金を多く掛けたらしく、牧水は身分不相応な税金だとこぼしていた。この時初めて大悟法先生にも会いましたが牧水と一緒に沼津駅まで送ってもらいました。

次に会ったのが大正13年でした。この時は長男旅人君を同伴でした。旅人君がたしか小学校の五年生でした。この時は老母の慰問と墓参その他でした。その次は昭和2年でしたが、この時は朝鮮行脚の帰りの老母慰問でした。初めての家内(喜志子)同伴での郷土入りであったと思います。その際は朝鮮行脚が無理であったのか大変くたびれていました。牧水は親族一同の写真を撮っておこうと延岡から写真師を呼んだのですが、私が学校に奉職している関係上一名欠けたのでした。私が帰って参りますと、君を待っておったが光線の関係で撮ったけれど今一枚ここで撮っておこうと撮ったのが村が刊行した牧水と郷土の始めの写真であります。この写真は牧水最後の坪谷生活の写真となりましたが、牧水はこれがこの世の別れの写真とは思わなかったのでしょうか。今になって考えますと私一人が欠けているために今一枚撮ったのもここに別れの意味があったようにも思われます。

牧水は皆様から大変可愛がられていますが、他人様から慕われ可愛がられる素質が多分にあつたように思います。昭和2年に帰郷した時に、或る校長さんが牧水に会って、ハダザワリのよい立派な人ですね、初めて会ってほんとに親しみがある方ですねと言っておられました。

牧水は歌によっても可愛がられているのですが、性格といいですか、人柄といいですか、これが人を引きつけたのではないのかとも思います。全く円満な人格者であったように思うのであります。

祖母の兄と牧水が友人で文通の書がありました。子供が産まれた時(女の子) 牧水が”露”と名前を付けてくれました。(令和3年 生家記帳簿に記載あり)

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

幹ほそく伸びたちたればそよ風にそよぎやはらかき山あぢさゐの花

大正13年の作。牧水39歳。

大正13年といえば

3月、長男旅人を連れて坪谷に帰郷

4月、父立歳13回忌法要を営み、母マキを伴って沼津に帰省

7月、紀行文集『みなかみ紀行』出版

ほっとひと息ついた時に詠んだのであろうか、穏やかな日を想像させる。



牧水はほかにも次のような「あぢさゐ」の歌を詠んでいます。

家のうち机のうへの紫陽花のうすら青みのつる真昼日	『砂丘』
あぢさゐやこよひはなにか淋しきに立ち出でて雨をあふぐ夜の庭	『砂丘』
花ちさき山あぢさゐの濃き藍のいろぞ澄みたる木の蔭に咲きて	『黒松』
立ち掩ふ木々の若葉の下かげにそよぎて咲ける山あぢさゐの花	『黒松』